山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第24号(2007.9)

古地図の読解をもとにした歴史学習単元の開発

吉川　幸男・西岡　光彦*・斉藤　千春*

Development of a History Study Unit based on Reading Comprehension of Old Maps

YOSHIKAWA Yukio, NISHIOKA Mitsuhiko* and SAITO Chiharu*

(Received July 20, 2007)

キーワード：古地図、歴史学習指導、歴史理解

はじめに

本小論の目的は、歴史学習において古地図を教材として活用するための単元構成の方法を試案的に開発することにある[1)]。その研究上の脈絡は以下の３点にある。

第一に、古地図を教材として位置づける実践事例そのものが稀少であることからくる、新たな教材開発としての脈絡である。一般に歴史学習において活用される教材としては、歴史的遺物としての「史料」としては文書的史料と絵画史料、及び遺跡・遺物があげられる。また、現代人の制作による「資料」としては、歴史図書、地図・年表、イラストや再現模型等があげられる。これらの中にあって古地図は本来的には「史料」ではあっても、文書史料や絵画史料ほどには活用されないのみならず、そもそも学校で採用される歴史学習用の副読本における掲載数が圧倒的に少ない。この現状は、古地図に関しては活用以前に教材としての可能性そのものが十分に見出されていないことをも物語る。

第二に、古地図教材の歴史理解形成上の固有性とは何かを一定程度明らかにするという脈絡である。特に近年では絵画史料に関して、歴史学習の教材としての有用性が独自に検討されることが少なくないのに対し、古地図に関してはこうした検討はまれである。視覚的な「史料」としての共通性を有するにもかかわらず、古地図には絵画史料とは異なる教材としての特性があるのであろうか。この点に関して、絵画史料とは異なる古地図の固有性を明らかにする必要がある。

第三に、「史料」としての古地図教材と、「資料」としての現代地図との、教材構成上の方法論を一定程度確立するという脈絡である。地図は時系列的な比較を行いやすい教材であるだけに、古地図と現代地図を対照することは最も容易に計画され、予測されうる学習活動になろう。そこでは何が読み取られ、どのように解釈すべく、学習指導がなされるのであろうか。こうした教材構成の方法を、学習指導との関連で明らかにする必要がある。

以上３点の脈絡により、以下では古地図活用を含む単元開発を、次のような手続きによって行うこととする。

＊山口大学大学院教育学研究科社会科教育専修

まず現行の学校カリキュラム、具体的には学習指導要領との関係が問題になる。当然教育研究としては、現行カリキュラムを固定的に想定したのでは古地図活用の方法的研究でしかなく、カリキュラムが改訂されれば有効性を失するものにしかなり得ないので、新たな歴史学習内容開発研究として、古地図活用によっていかなる内容を学び得るかを念頭においた単元開発を試みるべきであろう。しかしながら現行カリキュラムを全く考慮せずに独自の単元を開発することは、古地図を使用しない学習と古地図を活用する学習との学習内容論的差異を明確にし難いという意味で、実践的研究としてはむしろ非生産的といえよう。そこで以下では、現行カリキュラムのうち、小学校第３～４学年の地域学習の脈絡で行われる歴史学習に古地図を活用した場合と、小学校第６学年から中学校における「日本の歴史」の脈絡で行われる歴史学習に古地図を活用した場合との、二つの単元を開発し、それぞれにおいて古地図を用いない一般的な学習と対比して考察を進めよう。

この二つの場合を取り上げるのは、両者において歴史学習の中味が大きく異なるからであり、いわば前者が「歴史制作学習」とすれば後者は「歴史伝承学習」として性格付けられる[2)]。性格の異なるそれぞれの歴史学習において古地図の活用がいかなる学習内容を生み出し得るかを明らかにすることができよう。

１．古地図の読解による歴史理解形成の固有性

単元開発に際して、研究上の脈絡から、古地図の「史料」としての固有性と「教材」としての可能性を仮説的に措定しておく必要がある。特に同種の視覚的史料としての絵画史料との対比を念頭に、その固有性と活用の焦点をあげてみよう[3)]。

（１）内容の既定性

古地図が絵画史料と読解上大きく異なる点は、何が描かれているのかが読解過程の当初から既定されている点である。全体として一定区域に存在するものの位置を平面的に示すのが地図であるという既定的な了解のもとに、古地図は読まれてゆく。

このため、特にそこに描かれている一定区域の地勢を知る読者には、そこに示される全体構図としての意味は当初から固定されており、その上で個々の部分に示される個物の意味を確定してゆく読み方になる。たとえ読者に見知らぬ土地であっても、その区域の現在地図は比較的容易に入手できるため、基本的には同様の読み方になるであろう。このような「全体の意味を固定した上での部分の意味解読」になる点は、部分の意味と全体の意味を往復することによって解読されてゆくことが多い絵画史料とは異なる、古地図史料の読解過程の固有性ととらえることができよう。

古地図史料のこうした特性は、学習過程と学習活動の構成法に大きく作用する。絵画史料の活用を中心とした学習過程では、絵画に描かれた記号の意味を解読する際、部分からと全体からとが双方向的に進展するため、単元の初期段階でまず絵画を提示して気付く点や疑問点をランダムにあげてゆく、という活動が行われやすい。しかし古地図ではその解読過程がほぼ一方向的であるため、学習活動としては、まずその古地図と同区域を表した現在地図を意識し、現在との対比で部分的差異を発見してゆく、などという活動が初期段階で設定されることになろう。

（2）視点の固定性

古地図は絵画史料と同様、それが制作された時代に固有な描き方を反映する。学習者が初期段階で必ず気付く例としては、近代以降の地図が北を図面の上方にして描かれるのに対し、それ以前の地図はそのような規則によっていない点などがある。こうした点は絵画史料がその時代の絵画の様式や技法を反映するために個々の描出物を読解するより様式や技法で時代が推定できるのと同様である。

しかしながら、そうした時代の制作様式・技法に則りながらも、古地図の場合は「客観性」を装わなければならなかった点が絵画史料とは異なる。周知のように古地図の代表例としてのいわゆる「国絵図」は幕府が諸大名に命じて国単位で作らせたもので、統計資料として意味をも有していた。絵画史料のように描き手が対象に対する視点を独自に設定して描くのではなく、統計的価値に応えられるべく視点を固定し「客観的」かつ明示的に事物を表す必要がある。この結果現代の読者にとって、古地図は絵画史料よりも、より「制作者」が意識されにくい特性をもっている。

この特性はまた、やはり歴史学習の学習過程と学習活動の構成法に大きく作用する。絵画史料の読解指導においては、まず描かれている個々の部位のヒト、モノ、コトを解読する活動が組まれ、その途上で整合しない点、不審に思われる点などを抽出した後、そのように描いたことの意味を推論する過程で学習者に描き手が意識されてゆく。こうした学習過程の構成は古地図史料では難しい面がある。というのも、個々の部位を読み解く過程で整合しない点があったとしても、それは描き手の意図ではなく、「事実」の問題として読まれ、地図中に示されるような「事実」が生じた背景や経緯を探ってゆく学習過程に発展し、描き手のほうに追究が向かわないからである。実際にはいつの時代にも地図の制作には、制作者による情報の取捨選択がある。軍事的な理由で情報が歪められた地図もある。特に古地図には、その時代の情報選択基準が反映しているはずである。このような制作的立場に追究を向かわせる読解の指導方略の開発は、古地図活用の学習指導上の重要な課題といえる。

（3）通時性

古地図は、同区域を描いた複数枚を相互に対比して事物事象の変遷をとらえる読み方が比較的容易にできる。何よりも同区域の現在地図が容易に入手できるので、少なくとも現在との対比は可能になっている。この点は、同じ事物事象を描いた複数枚を揃えるのが非常に限られている絵画史料とは大きな相異といえる。さらに絵画史料の場合は描いた対象に相当する現在の事物事象すら存在しないことが多い。

絵画史料の読解は基本的に単一の絵画を読み解いてゆく作業であり、通時的に複数枚の絵画を読むのはその発展形態として位置付けられる[4]。これに対して古地図の読解は当初から複数枚の画像に対する作業として行われ得るし、むしろ一枚の古地図を目にしながらも、常に後の時代の地図や現在地図と対比し、その過程で必要なら実地にフィールドワークを行う、という作業は歴史探究として一般的に行われていよう。こうした通時的な探究は古地図史料活用の重要な固有性としてとらえられる。

ここからまた、固有の歴史学習の学習過程と学習活動の構成法を設定することができる。すなわち学習過程全体を通して、複数枚の古地図史料を通時的に検討し、平面上の一定区域を成立史・発展史的にとらえてゆく学習過程と、それら複数枚の相互の同一部位を対比

してその相異の経緯・背景を推論してゆく学習活動とが、古地図活用による固有かつ最も一般的な学習として構想されることになる。

以上、古地図の「史料」としての固有性を３点に焦点化し、その際の「教材」としての可能性を、①全体を意味的に確定した後の部分的意味解読、②制作的立場からの追究、③通時的検討による成立史・発展史的理解の形成、の３点に関する具体的な指導方略開発に求めようとした。以下では、この研究方向での２つの単元開発事例を述べる。

２.「鋳銭司のこれまでとこれから」の単元開発（小学校第４学年）

（１）地域学習における古地図活用の可能性

これまでの３・４年生の地域開発の単元学習といえば、ある特定の人物や事象などを取り上げ、地域の発展に尽くす過程での努力や苦心などを学ぶという学習がほとんどである。これらの学習には、特定の人物や事象を通して地域を点的に詳しく見つめ、ミクロな視点で学ぶことができるという利点がある。しかし、今回提案したいのは、特定の人物や事象を扱うミクロな視点での点的な学習ではなく、地域を周辺広域の中で捉え、その中でどのような成立過程を経てきたのかという、いわばマクロな視点で学ぶことができる面的な学習である。

具体的な方法としては、時代の異なる地図を重ね合わせ、その変遷を辿っていくことにより、いくつかの時代に渡って、地域の開発、発展に携わってきた先人たちの営み（人々の願いによって変わってきたもの）や客観的諸条件により変わってきたものを探っていき、そしてさらには、それらを踏まえて30年後の未来の地域の姿を推定していくという学習である。

そうすることにより、地域の姿を観念的にのみ考えるのではなく、地域が持つ客観的諸条件をも含めて、根拠を持って合理的に考えることができるようになるのではないかと考える。また、広域の地図を用いることで、よりマクロな視点から固有の地域構造を捉えるため、自らが地域形成の主体者として、これからの地域のあるべき姿を、他地域とのつながりを意識しながら考えていくことができる学習にもなるのではないかと考える。以下、これらのことを念頭に置き、面的な視点からの地域単元学習を構想してみたい。

（２）単元の概要

単元名：鋳銭司のこれまでとこれから（4年）

ねらい：

○自分たちの住む鋳銭司地域の今と昔の様子を地形、土地利用、交通、いろいろな施設等の立地などの面から地図や副読本などを用いて調べることを通して、主要幹線道路や鉄道などの交通面が整備されてきたという特徴をもつ反面、それを一歩外れれば水田や畑が広がるのどかな田園風景という二律背反的な地域構造を理解することができる。

○時代の異なる鋳銭司地域の地図、広域の地図を用いて鋳銭司地域の移り変わりを調べることを通して、先人たちの願いにより存在するもの（またはしたもの）とそうでないものがあるという二面性を理解することができる。

○鋳銭司地域に対する誇りや愛情を持ち、上記のような地域構造や他地域とのこれまでのつながりなどを客観的に捉えながら、これからは自分たちが鋳銭司地域を形成していく主体者であるという意識をもち、あるべき年後の姿について議論したり、絵地図に表したりすることができる。

（3）単元の指導計画（全８時間）

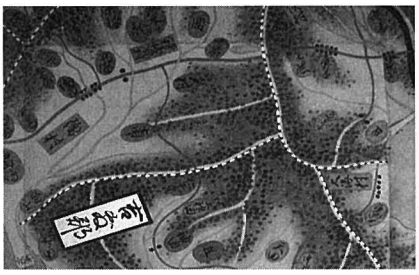
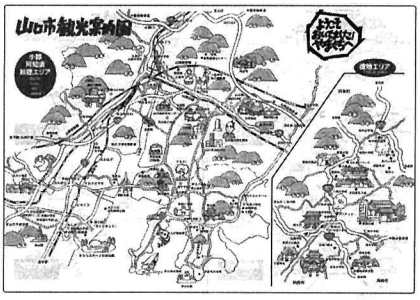
時	主な問い（内容）	資料	予想される児童の反応
第1時	○今と昔（江戸時代）の地図の描かれ方の違いを挙げてみよう。 ○今と昔の地図を見比べて、大きく変わった点と変わっていない点を探してみよう。	地図 No. 1 地図 No. 5	・今の地図は空からの写真をもとに作られているので正確だけど、昔の地図は歩いて測量したということを聞いたことがあるので、少しずれているところがあるかもしれない。 ・方角はほぼ同じようだね。 《大きく変わった点》 ・道路が増えている。（四辻バイパス、山陽自動車道など） ・鉄道が通っている。（山陽本線、山陽新幹線） ・新しい建物ができている。（学校、工場など） 《変わっていない点》 ・現在の国道２号線 ・長沢池 ・お寺や神社 ・地名
	留意点：今と昔の地図を見比べて、地図の描かれ方の違いに気付かせるとともに、何があり何がなかったのかということにも気付かせ、鋳銭司の変わってきた様子について調べようとする意欲を持つことができるようにする。		
第2・3時	○変わってきた様子を調べよう。 ・交通面 ・建造物面	地図 No. 1 地図 No. 5 地図 No. 6 地図 No. 7 ～ 11 副読本「鋳銭司」 年表 （補助資料） 地図 No. 2 地図 No. 3 地図 No. 4	《交通面》 ・1900 年に山陽鉄道（三田尻～厚狭）が開通し、1920 年には村人の願いから四辻駅もできてるよ。 ・江戸時代の街道だった山陽道は昔、「第四国道」と呼ばれていたけど、1921 年に「国道２号線」になったんだ。舗装されたのは随分後の 1960 年だね。 ・1987 年には渋滞緩和のため四辻バイパスができて、側道は地域の人々にとって便利になってるね。でも事故も多くなったんだ。同じ時に、山陽自動車道の山口南 IC もできて、トラック輸送に便利になったんだね。 《建造物面》 ・長沢池は、1651 年ごろにはもう東条九郎右衛門の努力により造られているね。農業を盛んにするためだったんだ。 ・黒山宮は816 年には建てられているよ。随分古いんだ。 ・鋳銭司跡地には昔（825 年～）お金を造る役所があったんだよ。今でも残っていればよかったのにね。 ・善立寺や誓安寺は、ずいぶん昔（江戸時代）からあるんだね。 ・鋳銭司小学校は 1872 年に開校したんだ。昔は「塾」だったんだね。
	留意点：変わってきた様子を調べる過程で、それらがどういう経緯を経て存在するようになったのかということを意識させる。また、広域を示した地図も用いることにより、小郡周辺地域の中の一鋳銭司地域として広域の中で考えることが出来るようにする。		

第4時	○地図や年表から分かる鋳銭司の特徴をまとめよう。 ・人々の願いから生まれたものとそうでないものが存在する二面性 ・交通面が整備されてきた反面、一歩道を入れば田園風景が広がるという二律背反性	地図No.1 地図No.5 地図No.6 地図No.7～11 副読本「鋳銭司」 年表 (補助資料) 地図No.2 地図No.3 地図No.4	・(無くなってしまったものもあるけど) 昔からあるものは、今でも大事に残されているんだね。 ・鋳銭司地域に若い人を増やしたり、働き口を増やしたりするために工場団地は作られたんだね。 ・鋳銭司は、昔から、交通の要所だったので、今でも道路や鉄道などがたくさん通っているんだ。だけど、一歩道を入れば、田園風景が広がり、まだまだ昔のままのところも多いね。 ・長沢池や四辻駅などいろいろなものが、人々の願いから造られてきているけど、道路(山陽自動車道)や鉄道などは人々の願いから造られたのではなく、国や県の主導で造られたものなんだね。
	留意点：前時で調べたことをもとに、鋳銭司という地域が固有にもつ二律背反的な特徴(交通面での発達とのどかな田園風景)をつかみ、また、地域の形成には、人々の願いが生かされる側面とそうでない側面があるということにも気付かせる。		
第5時	これから30年後、鋳銭司はどのように変わっているだろう？		
	○鋳銭司の30年後の絵地図を描いてみよう。 ・変わらないもの ・新しく出来るもの ・無くなっているもの	地図No.1 地図No.5 地図No.6 地図No.7～11 副読本「鋳銭司」 白地図(鋳銭司地域)	《変わらないものを中心に》 ・両足寺は残っているだろうな。600年も前からずっと残っているし、地域の人々も昔からずっとお参りしているし。 ・ぼくは、江戸時代からある長沢池は残っていると思うな。なぜなら、人々の願いから生まれたものだし、鋳銭司地域だけでなく台道地域の農業にも大いに役立っているから。 ・四辻駅は人々の願いから出来たものだし、利用客は減ってきているけど30年経っても存続しているだろうな。 《新しく出来るものを中心に》 ・トンボを守ろうとする人々の願いを反映して、トンボ博物館がこの辺りにできていると思うな。 ・交通量の多い国道2号線沿いのこの辺りに、トラックもたくさん止まれるコンビニエンスストアーができていると思うな。 《無くなっているものを中心に》 ・鋳銭司地域の人口は減ってきているので幼稚園や小学校、公民館などが陶地域と一緒になっているかもしれないな。 ・良質な酒米をたくさん作っている田んぼは、道路建設などによってこれ以上減ってほしくないけど、今より減っているだろうな。
	留意点：30年後の絵地図を描くことを通して、主観的な見方だけでなく、現在置かれている諸条件を考えた上でその実現性を問うという客観的な見方でも考えることが出来るようにする。(場合によっては、地域の方々にアンケートを実施するという意見が出ることも考えられる)		
第6時	○小郡地域の中での30年後の鋳銭司地域の絵地図をグループごとに描いてみよう。 ・主観的な願いと、広域の中で鋳銭司地域がもつ客観的諸条件を合わ	地図No.1 地図No.5 地図No.6 地図No.7～11 副読本「鋳銭司」 白地図(広域)	・30年後もあまり変化はないような気がする。 ・小郡の街が今よりもっと大きくなっていて、人口も増えるかもしれないので、鋳銭司地域の田んぼやため池はつぶされて団地化されているかもしれないな。 ・今ある自然をもっと生かして、北部の和西地区に大きな自然公園が出来ているかもしれないな。 ・今、計画進行中の平川や大内へ繋がる道路が通っていれば、北部の和西地区や畑地区の辺りには、住宅

	せ考えた30年後の姿	アンケート用紙 (場合によっては)	が増えているかもしれないな。
	留意点：前時同様、主観的な見方だけでなく、現在置かれている諸条件を考えた上でその実現性を問うという客観的な見方でも考えることが出来るようにするとともに、鋳銭司地域の30 年後を考える場合には、広域の中での鋳銭司地域を捉える必要があるという観点の下、広域地図の中に鋳銭司地域を描かせることで、よりマクロな視点から鋳銭司地域を捉えることができるようにする。		
第7・8時	○グループごとに描いた絵地図を比較して、どれが実現性が高いか議論してみよう。 ・主観的な願いと、鋳銭司地域がもつ客観的諸条件を合わせ考えた30年後の姿	地図No. 1 地図No. 5 地図No. 6 地図No. 7 ～ 11 副読本「鋳銭司」 白地図（鋳銭司地域） アンケート用紙 (場合によっては)	・Aグループの絵地図には、デパートが描かれているけど、隣の小郡や防府のデパートが無くなっていれば可能性はあるかもしれない。だけどそれは考えにくいんじゃないかな。 ・Bグループの絵地図には、トンボ博物館が描かれているけど、僕たちも出来ていると思う。ただし僕たちの場合は新たに造るんじゃなくて今の郷土館と一緒になっているんだ。 ・Cグループの絵地図は一番実現性が高そうだね。今でも道路建設が進んでいるけど、どんどん交通が便利になっている様子が分かるし、それを生かして工場も今より少し増えている。その反面、田んぼやため池の数は少しは減っているようだけど、ほぼそのまま維持されているしね・・・。 ・Dグループの絵地図は、Cグループの絵地図と同じように、道路や工場がたくさん増えているけど、田んぼやため池などはつぶされて団地も出来ている。交通の便がよくなればあり得ることかも知れないね。 （・Eグループの絵地図は、地域の人々の願いにもあったように、○○が造られているし、▲▲もできているので一番実現性が高いかもしれないね。）
	留意点：描かれた地図の中で、一番実現性の高いものはどれかを議論することを通して、鋳銭司地域がもつ固有の地域構造を客観的に認識させる。		

（4）使用地図史料

No.	地図及び絵地図	描かれている年代及び特徴
1	宗広公御国廻記録 	(年代) 寛保２年（1742） (特徴) 今宿、畑などの地名の由来が記されているとともに、街道松や一里塚などが整備された様子がうかがえる絵地図。由来については解読の必要があるが、地名は現存するものと同じであり難なく読み取れる。No. 5 と描かれた領域と縮尺がほぼ等しいため比較の対象として用いることができる。 (出典)『絵図で見る防長の町と村』山口県文書館、1989
2	二万五千分の１地形図 	(年代) 現在 (特徴) いわゆる現在の地形図。これまでと大きく違う点は、国道２号線の拡充をはじめ、山陽新幹線や山陽自動車道などの交通網の整備、工場団地の開発、積水ハウスなどの進出が見て取れる点。 (発行) 国土地理院

3	防長両国郡別絵図　吉敷郡（写し） 	（年代）天保 12 年（1841） （特徴）吉敷郡内の小郡宰判と山口宰判を描いた絵地図。広域で描かれているため、当時の鋳銭司村と小郡村、或いは陶村などとの比較を行うことが可能。例えば、市や勘場、御茶屋の有無など。 （山口県文書館所蔵）
4	防長郡別図 	（年代）不詳 （特徴）No. 3 と同様、吉敷郡内の小郡宰判と山口宰判を描いた絵地図で、広域で描かれているため、当時の鋳銭司村と小郡村、或いは陶村などとの比較を行うことが可能。例えば、市や勘場、御茶屋の有無など。 （山口県文書館所蔵）
5	「すぜんじまっぷ」 	（年代）現在 （特徴）子どもたちには比較的読み取りやすい絵地図。周辺の観光案内図として鋳銭司郷土館が発行したもの。No. 1 と描かれた領域と縮尺がほぼ等しいため比較の対象として用いることができる。 （発行）鋳銭司郷土館
6	「山口市観光案内図」  	（年代）現在 （特徴）小郡、阿知須、秋穂エリアの山口市観光案内図で、鋳銭司地域を含めた現在の小郡周辺の様子を描いた絵地図である。広域における鋳銭司地域の位置関係や主要な文化遺産などを読み取ることができる。 （発行）山口観光コンベンション協会
7 ～ 11	地形図 	（年代）明治 34 年（No. 7）、昭和 2 年（No. 8）、昭和 22 年（No. 9）、昭和 34 年（No. 10）、昭和 52 年（No. 11） （特徴）各時代の広域地形図。時系列的に見ていくことで、交通面での変遷の様子を広域につかみとることができる。

３.「萩城下町の変遷」の単元開発（中学校歴史的分野）

（１）「身近な地域の歴史」における古地図活用の有効性

中学生が身近な地域を学習することの有効性は以下の①～④にあると考えられる。

①生徒が、歴史を身近な事象や史･資料、遺跡･遺構などから、具体的に学べること

②生徒が、歴史的事象を、為政者や中央からの視点からだけでなく、民衆や地方からの視点で多面的に捉えること

③生徒の身近な地域への関心や身近な地域を尊重する気持ちが高まること

④身近な地域の学習を通して、歴史を身近に感じ、さらに自発的に歴史を学ぶ意欲が高まること

これらの有効性に基づき、萩城下町の変遷を学ぶことの有効性は以下のア～ウのように考えられる。

ア、江戸時代の城下町について、史料（絵地図）を中心に学び、補足資料として萩城や城下町についての文献や、発掘調査の成果などを参考に学ぶ。また、現存する武家屋敷や町屋敷などからも具体的に学ぶことができる。

イ、城下町の発展を江戸幕府の政策からではなく、個別具体的な萩の城下町から捉えることが出来る。

ウ、萩の城下町の学習をすることにより、現存する遺構などの価値を知り、尊重する気持ちやさらに自発的に歴史を学ぶきっかけとすることが出来る。

以上のような有効性を生かして、単元構想を行う。

（２）単元の概要

1) 目標

○一般的な江戸時代の城下町の構造を理解する。

○江戸時代の萩城下町の変遷を、絵地図を時代ごとに追っていくことにより、理解し説明することが出来る。

○江戸時代の萩城下町の発展を当時の人々の暮らしに即して説明することが出来る。

2) 学習内容

（ｉ）城下町の一般的な構造や中心・周辺関係

・城下町は基本となる街道を基に整備される

・身分ごとに居住地が分けられる

・城に近い場所に上級武士の屋敷があり、その周辺に中・下級武士の屋敷や町があり、さらにその周辺に田畑や百姓地が見られる

（ⅱ）萩城下町の変遷

・洪水対策、河川改修がされている。

・武家屋敷は、藩政時代を通じて三角州内を埋め立てながら拡大されている

・町の拡大は、侍屋敷が町屋敷化している

（ⅲ）萩城下町の変遷の背景･理由

・人口の増加

・洪水対策

・参勤交代の際通る御成道沿いの景観整備

・菊屋家などの町人の経済的発展

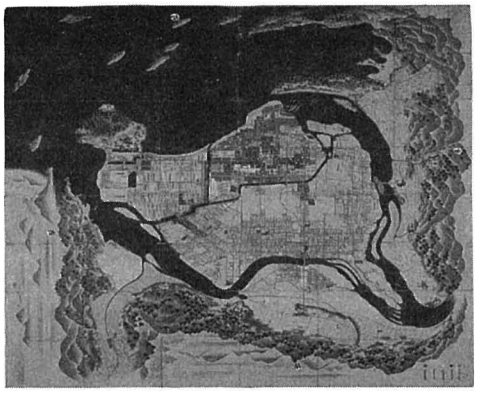
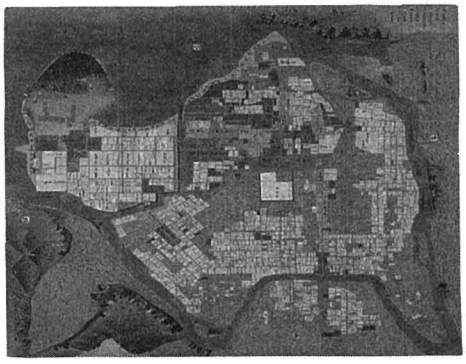
（3）単元の指導計画（全９時間）

時	主な問い	史・資料	予想される生徒の反応
第1時	城下町とはどんなところだろう 活動： 『慶安５年（1652）萩城下町絵図』をトレイスしたものに侍屋敷、町、寺社地、田、畑ごとに色を塗らせる。 ・気づいたことと、その理由を考えてノートに書き、発表する。	『慶安５年（1652）萩城下町絵図』（No.1） 教科書 資料集	・道路が直線で整備されている。 →城下町は自然に出来たものではなく、意図してつくられた。 ・武家屋敷や町人地はある程度まとまっている。 →身分ごとに居住区が分けられる。 ・城に近いところに上級武士の屋敷があり、その周辺に中・下級武士の屋敷があり、さらにその周辺に田や畑が見られる。 ・武家地が多い。 →城下町の中心は武士であった。
	留意点：導入の部分ではあるが、この作業が後の授業に大きく関わる部分なので、できるだけ丁寧に絵図から城下町の構造を読み取らせる。また、見てわかる現象だけでなく、その理由もあわせて考えさせる。またそれを自分でまとめ、発表させることにより、情報・認識の共有を図る。その後、教科書などで萩城下町も一般的な江戸時代の城下町の構造であることを確認する。		
第2・3時	萩城下町は時代とともにどう変化したのだろう 活動： 『慶安５年（1652）萩城下町絵図』『宝暦元年（1751）萩大絵図』『安政元年（1854）頃萩丁割絵図』を比べる。 ・変化している場所に印をつけ、何がどのように変化したかを班ごとにまとめ発表する。	『慶安５年（1652）萩城下町絵図』（No.1） 『宝暦元年（1751）萩大絵図』（No.2） 『安政元年（1854）頃萩丁割絵図』（No.3）	○『慶安５年（1652）萩城下町絵図』と『宝暦元年（1751）萩大絵図』の比較 ・田地や畑地が侍屋敷や、町になっている。（主に絵図東側と南側） ・濱だった部分が町になっている。（絵図北部） ・侍屋敷だった部分が町になっている。（唐樋町、御許町） ・水路が出来ている。 ・堀が狭くなって、町が出来ている。（南片河町、北片河町） ○『宝暦元年（1751）萩大絵図』と『安政元年（1854）頃萩丁割絵図』の比較 ・田畑だった部分に少し、武家地が増えている。（絵図南東） ・あまり変っていない。 ・明倫館が出来ている。（絵図中央） ＊武家屋敷は、藩政時代を通じて三角州内を埋め立てながら拡大されているが、1751年～1854年はあまり増えていない。 ＊町の拡大は、侍屋敷が町屋敷化している部分があり、大きな街道沿いである。 ＊水路などの工事がされている。
	留意点：まず、萩城下町絵図が藩政時代を通じ多く作成されていることから、城下町が変化して言った事に気づかせる。その後、班ごとに活動させる。約100年後とに時代を追い絵図の変化を読み取らせる。気づいたことをまとめて、発表させ、情報・認識の共有を図る。		
第4時	萩城下町は、なぜ変化したのだろう 活動： 班ごとに調べるテーマを決め、仮説を立てる。 ・仮説検証のために何を調べればよいかを考える。	絵図 『八江萩名所図画』（No.4） 『八江萩名所図画　付録』 など	○調べるテーマ例 ＊河川の改修について ・なぜ河川の改修が行われたのだろう。 ・どのような改修だったのか。など ＊武家屋敷の拡大・変化について ・なぜ武家地が増えたのだろうか。 ・どのような武士が増えたのか。（移動したのか）など ＊町の拡大、変化について ・なぜ町が増えたのか。 ・どのような町が増えたのか。

			・武家屋敷が町に変ったのはなぜか。など
	留意点：前回までの授業で気づいたことやなぜと思ったことについて、調べたいテーマを決めさせる。そのことについての仮説をたて、検証のための手段も考えさせる。その際、人々の暮しなどについても着目させる。また、実際に城下町で何を見て，何を調べるかなどの計画を立てさせる。		
第4・5・6時	活動： 実際に、萩城下町に行き、城下町を見たり、博物館に行って仮説を検証する。	絵図 『八江萩名所図画』（No.4） 『八江萩名所図画　付録』 博物館 城下町 メモ など	＊河川の改修について →度重なる洪水があり、堤防を作ったり排水のために水路の改修が行われたなど･･･ ＊武家屋敷の拡大･変化について →人口の増加など･･･ ＊町の拡大 →参勤交代の際通る御成道沿いの景観整備、菊屋家などの町人の経済的発展など･･･
	留意点：それぞれのグループを見てまわり、必要ならば視点や助言を与える。また、シルバーガイドの方や、博物館の方にも話を聞いたりする。		
第7・8時	萩城下町はどのようなところだったのだろう 活動： 調べてきたことをまとめ、発表し、萩城下町はどのようなところであったかを考察する。		・毛利輝元により整備された城下町は、武家地や町が畑地や田地などを埋め立てながら拡大した。中には武家地が町人地化する場所もあった。また、三角州という土地柄から、洪水に悩まされ、河川工事や水路などの改修工事、整備なども行われた。そのご、築城100年頃までには城下町がほぼ整った。武士は時代が進むにつれ困窮するものが現れ、住居を移転したり、借家として貸し出すものもあった。一方町の中には、藩ご用達となり富を蓄え大きく栄えたものもあった。
	留意点：これまでの学習のまとめを行う。班ごとやテーマごとに調べてわかったことをまとめ、さらにそれらをもとに江戸時代の萩城下町の様子を考察する。		

（4）使用地図・絵図

No.	地図及び絵地図	描かれている年代及び特徴
1	正保萩城下町下絵図 	年代：1652（慶安5年） 特徴： 江戸時代初期の萩の町の土地利用が描かれており、城の記述も詳細である。 武家屋敷、町などに色がついていないので、文字を子供たちが読めるように手を加えれば色塗りをさせるのに有効である。 (山口県文書館所蔵)

2	萩大絵図 	年代：1751（宝暦元年） 特徴： 江戸時代中期の萩の町の土地利用が描かれており、城の記述、武家屋敷の記述が詳細で、町は、町ごとに色が分けられている。 田畑の利用については省略されている。町の変化、武家屋敷の変化、水路の構築などがわかる。 (山口県文書館所蔵)
3	萩丁割絵図 	年代：1854（安政元）年頃 特徴： 江戸時代後期の萩の町の土地利用が描かれている。 武家屋敷の記述が詳細で、町は、町ごとに色が分けられ、町名も書かれている。 中央に明倫館が描かれており、2との比較がしやすい。 (山口県文書館所蔵)
4	『八江萩名所図画』 	特徴： 萩の「名所」として様々な場所や、祭りなどが描かれている。 当時の町の様子や、人々の暮らしが描かれており、考察の手助けとなると考えられる。 付録は、教師による訳や注釈が必要である。 出典：松本二郎『八江萩名所図画』 マツノ書店、1990

おわりに

以上２つの単元開発の試案を作成して、先述した３点の固有性から明らかになってきた点と課題をあげておこう。

まず第一に、全体を確定した後の、部分への探究視点の移動に関して、小学校の事例である「鋳銭司のこれまでとこれから」（以下「鋳銭司」と略記）の単元では、現在と江戸

時代の地図全体を相互比較して、「変わった点と変わっていない点」をあげてゆく方法をとっている。単純比較ではなく、「変化・不変」という連続的推移を意識した学習として構成している。一方、中学校の事例である「萩城下町の変遷」（以下「萩城下町」と略記）の単元では、色を塗るという作業を通して慶安５年時点の土地利用に学習を方向付けている。「鋳銭司」が点と線に着目させるのに対し、「萩城下町」は線と面に着目させる。古地図読解の基本的探究過程として全体から部分への着視点の移動を仮説的に見込んでいたが、その「部分」には地図の場合、点と線と面が想定され、学習者をまずどれに着目させるのかという学習過程構成上の課題が生じる。この中では両単元とも線が重要な役割を果たしているが、このことは古地図の読みとして一般的なのか、単元のねらいとの関係から来たものか、今後こうした目標と地図への着視点との関係を探っていく必要がある。

第二に、制作者の立場からの追究に関しては、「鋳銭司」「萩城下町」のいずれの単元でも組み込み得なかった。このため現段階では古地図史料に対する史料批判は行わず、記されている諸記号をすべて事実の表現と解することから学習が出発している。なぜそうならざるを得なかったのか。最大の要因はそれぞれの地図の制作目的と制作当時の諸条件をある程度整理して把握することの困難さにある。先述のとおり、古地図の中にあっていわゆる「国絵図」は幕府が諸大名に提出させるという非常に政治的な目的のために制作されたが、もっと限定的な村単位の地図は検地、巡見、編成改革など多種多様な目的のために制作されたという[5]。中には制作経緯の明確でない地図も少なくない。「鋳銭司」「萩城下町」のいずれの単元でも、使用される地図は制作経緯が明確なものばかりではない。加えて、目的の明確な「国絵図」にしても制作時期（慶長、正保、元禄、天保）によって表現が大きく異なるという[6]。学習者にとってこのような目的や諸条件の異なる地図を、制作経緯まで念頭において相互に対比するのは、特に小中学生には極めて困難な学習になる。とはいえ、古地図の読解において制作者の立場からの追究は本質的な構成要素の一つには違いないので、ほぼ同目的の制作経緯をもつ地図で対比するなど制作者に接近可能な学習過程は今後開発してゆく必要がある。

第三に、通時的検討による成立史・発展史的な内容に関しては、「鋳銭司」「萩城下町」とも、いずれも当初構想していた以上に発展性が見込まれることが明らかになってきた。「鋳銭司」では江戸時代から明治、大正、昭和を経て現在、さらに将来に向けての学習過程が構成されている。「鋳銭司」の冒頭で述べているように小学校第４学年のいわゆる「開発単元」では一般に一事象集中的・単線的な発展史に立って学ばれることが多いのに対し、「鋳銭司」は古地図の活用により、地域全体を面的にとらえて将来の地域像を展望する学習を組んでいる。一方「萩城下町」は学習指導要領にいう「身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解」という脈絡で学ばれることになるであろうが、古地図を教材化することによって「地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解」という中央寄りの歴史理解を超え、地域の独自の形成を動的にとらえる内容を構成している。両単元はいずれも、地域の形成に関わる学習内容を生み出している点に、古地図活用の社会科教育としての重要な意義を見出すことができる。

註

1）古地図には絵図を含め、様々な表現形態のものがあるが、ここでは現在より以前に制作され、現在の事象とは異なる事実を表す地図を総称して現段階での作業上、古地図と呼ぶことにする。現実的に実践可能な単元を開発するには大括りな時代区分で、時期的・分野的に通覧できる概念を必要とするためである。

2）吉川幸男「歴史学習における「制作」と「読解」の構成　－小学校第６学年歴史学習論」『社会科研究』第57号、2003

3）絵画史料を活用した歴史学習に関する研究的なものは、主に1990年代前半に理論化・方法化が試みられた。池野範男「歴史理解における視点の機能（１）」『社会科研究』第40号、1992、は絵画史料による歴史学習がどのような歴史学習過程と歴史理解をもたらすのかを解明した。これに続いて、橋本和之（1995）「絵画史料を用いた歴史授業構成（Ⅰ）」『教育学研究紀要』第41巻第２号、1995、及び、佐藤廣「絵画史料を活用した歴史授業構成の研究」『社会系教科教育学研究』第８号、1996、が続いた。前者は池野の視座を継承し、絵画史料で歴史理解がどう形成されるのかを解明する認識論的側面の研究を進めたものであり、後者は歴史理解との関係を踏まえて教材構成論を原理的に提示することを試みた。

4）絵画史料解読において重要な仕事を遺してきた黒田日出男は、絵画読解の大筋に関して、①画像の一つ一つが何であるかを確認する事実確認、②幾何学的な構図分析、③前二者の総合的把握、という三段階を提示し（黒田日出男『姿としぐさの中世史』平凡社、1986）、単一の絵画を部分から解読する基本プロセスを説いている。ただし黒田は、絵巻物の分析方法に関して「単独の絵巻物の読解・分析」「絵巻物群の読解・分析」「通絵巻物的読解・分析」の３つの方法を示しており（黒田日出男「絵巻物の分析とその方法」『歴史の読み方Ⅰ　絵画史料の読み方』朝日新聞社、1988）、ある程度様式化された特定ジャンルに関しては、古地図に類似した手法がとられることも示している。

5）久武哲也・長谷川孝治編『地図と文化』地人書房、1989、pp. 122-125

6）同上、pp. 70-73

［付記］

[1] 本研究は、2006年度後期・教育学研究科社会科教育専修の演習授業「社会科教育特論Ⅱ」（吉川担当）の成果をもとに、見出し項目１を吉川が、２を西岡が、３を斉藤が執筆し、全編のまとめを吉川が行った。

[2] 本研究は、平成18-19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））（研究代表者　吉川幸男、課題番号18530714）による研究成果の一部を構成している。